

## 「新たな力を得る」

### イザヤ書 40章28～31節

本学講師・日本キリスト教団安行教会牧師 田中 かおる

皆さんは、鷲が大空を舞う姿を見たことがありますか？実物でなくても、映像でならみたことがある人もいることでしょう。鷲は翼を広げるとその長さが 2m50 cmもあるそうです。大きな鷲が翼を広げて悠々と自由に空を舞う姿は雄大で、見ている者の心も一緒に空を舞っているような自由さを覚えるものです。この大きな鷲がなぜ、あんなに悠々と空を舞うことができるかという、鷲は「上昇気流」に乗って舞い上がるからだそうです。「上昇気流」というのは、地表の空気が暖められて上昇する気流や、斜面を上る気流のことで、鷲は、この上昇気流に身を任せて翼や尾羽を大きく広げて羽ばたかずに旋回し高度をあげていくのだそうです。そして、ある程度の高さまで上昇すると、翼を広げたまま羽ばたかずに、重力を利用してグライダーのように飛んでいるのだそうです。大きな身体を空の大気に身を任せているから、あんなふうに悠々と見えるし、実際、疲れずに旋回してられる、ということです。自分でバタバタするのではない、のです。

今日の聖書の言葉は、そういう鷲の性質をよく知っている人の言葉です。イザヤ書は、大きく3つに分かれており、1～39章(第一イザヤ)、40～55章(第二イザヤ)、56～66章(第三イザヤ)がその区分です。この時、聖書の舞台はどんな時代だったかという、第一イザヤ(紀元前700年代)はアッシリア帝国の侵略を体験し、また、第二イザヤはバビロニア帝国の侵略とエルサレム崩壊・バビロニア捕囚(紀元前500年代)を体験しました。これらは、イスラエルの人々にとって、立ちあがることのできないほどの大きな挫折であり、ダメージでした。第二イザヤ時代には、国が滅び、生き残った者達の内、主だった者達は遠い異教の地・バビロニアに連れていかれてしまう、という暗黒の時代でした。「希望」などということは、人々の目にはおよそ縁のないことのように思える時代だったのです。しかし、人間の目からみたらそうであっても、第二イザヤには「もうひとつの現実」が見えていました。それが、「主に望みをおく人は、新たな力を得、鷲のように翼を張って上る」ことのできる現実、でした。「主に望みをおく」とは、主なる神を信じる、ということです。主なる神のなされる業は、私たちが目でみえることを超えている、という事を信じるということです。「主は、とこしえにいます神、地の果てに及ぶすべてのものの造り主」という事を信じ、その「世界の創造主なる神」は、人間の目に見える目の前の現実を超えて、この世界を慈しみ、人間を愛するお方だ、と信じることです。世の状況がどうあろうと神は人間を愛することをお止めにならない、その事実を信じることです。…それができると、「新たな力を得て、鷲のように翼を張って(大気を上り)、(どんなに現実が厳しくとも)弱らず、疲れない…第二イザヤは、そういう「もうひとつの現実」をみている、「希望」を失わなかったのです。そして、それはどの時代にも変わらない「もうひとつの現実」です。

21世紀を生きる私たちは、コロナ感染という世界規模の困難、民主主義が脅かされる世界の情勢、

先行きの不透明な状況に身を置いています。けれども、イザヤが目上げることのできた「もう一つの現実」が今も変わらずに示されていることに気づく時、「新たな力を得、鷲のように翼を張って上る」ことができます。「主に望みをおく」…ここに目上げる時、それぞれの置かれた場所で励んでいく力が与えられます。

[祈り]

主なる神さま

私たちの住む世界は、いつも、混乱や困難、悲しみが絶えることはありません。

時として、「希望」が見いだせない思いになります。

しかし、ふと目をあげると、そうであるにもかかわらず、あなたは人間を慈しみ、愛していただくことをお止めにならない、ということに気づかされます。そのあなたに望みをおいて、歩んでいくことができますように。あなたから「新たな力を得、鷲のように翼を張って」それぞれの置かれた立場で励んでいく力をお与えください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン

2021年10月21日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖書が語る希望」